

氏名	モウ 孟	カイ 海	カ 霞
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第376号		
学位授与年月日	平成24年3月26日		
学位論文等題目	〈論文〉近代詩の美意識－日中近代詩に即しての考察－		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）
（論文第1副査）	〃	〃	（ 〃 ）
（副査）	〃	准教授	（ 〃 ）
（ 〃 ）	東京女子大学	教授	
			松尾大 佐藤道信 布施英利 久保光志

（論文内容の要旨）

詩歌は最も古い文学形式で、言語芸術の代表である。日本の独特な風土と人情は日本特有の詩歌を生み、独特な文学伝統を形成させてきた。和歌、俳句、漢詩等が古代詩歌の世界を構成し、近代以降、更に近代詩が生まれた。全体的に言えば、日本の詩歌に三つの特徴があると思う。

①外国からの影響が大きいこと；②独特の音数律；③日本独特の美意識が含まれること。

日本詩歌の中で、筆者が最も興味を感じるのは近代詩の部分である。明治維新の時代風潮の中で、新しく誕生したこの新スタイルの詩は、誕生の最初から翻訳を通じて西洋の影響を大きく受け、たくさんの流派・実験・論争を経て、延々と今まで人々に書き続けられた。何千年も続いた詩の形を変えた当時の作者たちが、何を「美」だと思って詩で捉えようとしたのか、近代詩の「美的」価値はどのようなものであろうか。更に、上記のような三つの特徴は近代詩の段階になると、どうなるのか。

一方、同じ漢字文化圏に属する日本と中国は近代詩のジャンルにおいて、両国とも西洋の影響を受けて、翻訳詩からスタートしたのである。その成立過程において、多くの相似点があった。更に、中国の現代詩人郭沫若を始め、相当の新詩人が日本に留学した経験があった。日本の詩歌の形と意味世界が中国の近代詩に模倣されて、「小詩運動」になったこともある。近代文学における日本と中国の多方面にわたる交流が、近代詩の部分においても発揮されていた。

その理由に基づいて、日本と中国の近代詩を対応的に研究したら、新しい角度で近代詩の本質を探究することになるだろうと思う。

論文は三つの章に分けて下記のように展開していく。

第一章 近代詩の美意識考察

日中近（現）代詩の定義を明らかにしてから、7つの部分に分けて、それぞれ近代詩の構築、言葉、詩体、リズム、意味世界、レトリック、翻訳と近代詩の誕生の方面から分析し、近代詩の美的価値を検討してみたいと思う。

1. 近代詩の構築
2. 近代詩の言葉

文語と口語、語感、詩語の方面から近代詩の詩語になる要素、近代詩における言葉の変化を分析する。とくに呼格の常用化と第一・三人称、複数の使用、新語の取り入れを分析する。

3. 近代詩の詩体

主に、ソネット形式の吸収と変化、長詩形の導入、文字・詩文表記による詩形の構成を分析する。

4. 近代詩のリズム

5. 近代詩の意味世界

桜と女性のイメージの変化が演出する「伝統からの脱出一変」、「独特なビジュアル美」、「象徴主義の核心－神秘と醜」、自然に対する意識と「崇高」精神のずれを考察する。そのなかで、西洋の自然観と中国の「天人合一」思想、日本人の自然観と比較する視点で分析を進める。

6. 近代詩のレトリック

7. 翻訳と近代詩の誕生

第二章 近代詩が「詩」として存在する要因

1. 近代詩の捨てたもの

近代詩は多くのものを捨てた。その中に大きいものが五つあると思う。①（詩的言葉としての）文語；②音数律；③（定型の）形；④伝統のレトリック；⑤伝統音楽絵画との緊密な関係である。そして「挨拶の心」、詩人になるための厳しい要求をも捨てた。顧みる余地のないものは諧の精神である。

2. 近代詩の取り入れたもの

こんなに多くのものを捨てたのに、何故詩として存続することができたのか。社会・文化の原因はともかく、近代詩の自身における原因を探求したいと思う。それはやはり近代詩が新しい詩的要素を多く取り入れたからである。それは、それぞれ①時代を反映する口語；②内在律；③特に詩の翻訳に役立つ自在な形；④隠喩（メタファー）等の多用による現代的なレトリック；④音楽と結びつく傾向である。「恋愛」などの新しい題材の取り入れも特徴である。

3. 現代詩の未来

第三章 日中近代詩の比較研究

1. 日中近代詩の誕生過程における相似点

社会背景、詩人、翻訳の働き、聖書訳本の影響という四つの方面で比較し、相似点を考察する。

2. 中国の新詩誕生における日本の働き

中国新詩人の日本留学、日本訳語の逆輸入、媒介作用と先導作用、「小詩運動」という四つの方面で分析する。

3. 日中新詩界の交流

日本の中国現代詩研究

中国の日本近現代詩研究

今日にいたって詩、特に現代詩が衰えてきたということは情けない事実である。しかし、科学技術が発達する一方、不祥事もよく現れる現代社会こそ詩的精神が必要になるのであろう。詩歌研究は現代人にとって、人間価値の再認識と自己反省に繋がり、ほんとうの「美」を求めることになるかと信じている。本論は近代詩の美意識を考察し、近代詩の自身における存続原因を探ることによって、近代詩の再認識にアプローチし、現代詩の未来を考えるのに役立つものになるだろうと筆者は思う。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文は、日本の近代詩をいくつかの点で分析し、その基底にある美意識を解明しようとするものである。

全体は大きく三部に分かれる。まず第一章は日本の近代詩を分析する。続く第二章は、近代詩をそれ

以前の詩と比較することによって、近代詩の特徴を浮き彫りにする。最後の第三章は、日本の近代詩を中国の近代詩と比較し、それらの間にいくつかの共通点があることを指摘する。

日本の近代詩を構築、言葉、詩体、リズム、意味世界、レトリック、翻訳という7つの観点から分析する第一章は、分量的に最も多く、また内容的にも最も充実している。そこでは日本の近代詩についての具体的鑑賞経験から得られた知見が提示されている。それらの知見は、日本語を母語としない者が、母語による中国の近代詩と絶えず比較しつつ獲得した知見であるから、日本語を母語とする者には気づきにくい側面に光が当てられている。

特に言葉の観点から近代詩を分析する第一章第2節は、論文著者が中国において日本語教育に携わる職にあるため、ひときわ卓越している。例えば日本語の「語感」という概念に中国語で対応するのは「語の感情の色彩」であるが、後者は色彩を持つ語と並んで色彩を持たない語もカテゴライズするので、日本語の「語感」概念では汲み取りにくい現象を解明することに成功している。また、呼格の常用化、第一人称代名詞の多用、複数使用の開始、新語の取り入れ、句読点の使用などの特徴の提示は、単なる文法範疇での分析にとどまらず、それら言語的特徴が表現する美意識にまで立ち入った解明となっている。

「近代詩が「詩」として存在する要因」と銘うたれた第二章は、近代詩が伝統的な詩の持つ多くの特徴を捨てたにもかかわらず、なお詩たりうるゆえんを探ることを目的とする。われわれにとってはなじみ深い近代詩も、成立当初は伝統的な詩のイメージを一新するものであったことを気づかせる点で、理論的な異化効果を持つ章である。

日中近代詩を比較する第三章は、両国の近代詩に等しく通じた論文著者ならではの章である。両国近代詩の成立過程の類似性、中国近代詩への日中近代詩の影響、それぞれの国における相手の国の近代詩研究という三つの軸は、比較文学、比較美学の研究として適切に設定されており、今後の研究の礎となるものである。

以上のことからわかるように、本論文には、日本の藝術を外国人が考察したという視点のユニークさと並んで、総合性という特徴もある。つまり、方法的には絶えず中国近代詩という比較対象を参照しながらの研究であるが、対象的には日本の近代詩の特定の側面に限定せず、可能なすべての観点からこれを分析した研究たりえている。

もとよりこのような総合的研究においては、そのすべての部分でオリジナリティーを達成することは至難である。前述したように、論文著者独自の見解も少なくないが、また多くの知見がすでに先行する研究で獲得されたものであることも否定できない。しかし先行研究に負う知見と独自の知見を合わせて、日本の近代詩の全体像を描き切った論文著者の力量は、十分に博士の学位に値すると判断することができる。